

扇

が、ひるがえる。これを合図に、神宮の森の奥から、だいたい色の絹の掛け物で正装した馬が、全速力で駆けてくる。馬上で弓を構える、壮麗な狩装束姿の射手(いて)が、進行方向左の的に向かい、矢を放つ。一的、二的的、そして三的的。この間、およそ20秒。

美しい…。片身のみにつけた家紋入りの射籠手(いごて)、鹿の革製エプロンのような行膝(むかばき)といった、現代の目にはかなりアヴァンギャルドなモードにも映る鎌倉時代の武士の装束だけでも胸騒ぎがするが、その姿の射手が、走る馬の上で上体をまっすぐに立て、首をきりりと左に向け、3つの的を射るといふ武芸を演じるのである！ますらお、とはこんな男のことをいうのか。

欽明天皇の御世(539~571年)、天皇が天下泰平、五穀豊穡を祈願して、馬上から3つの的を射たことが「矢馳馬(やばさめ)」と呼ばれ、これが「流鏑馬(やぶさめ)」の起源になったという。だから、流鏑馬は武芸である以上に、神事である。的を射ることは、すなわち邪悪を射ること。邪悪を射る儀式(奉射)の部分においては、「式的」に四季の花が飾られる。かつて的を射損ねた武士が、己の未熟を恥じて自刃したことがあり、それ以降、的をはずれて「四季」を射ても「式的」を射たとみなすのだそう。武

おやしぎやぐで照れ隠しした、武士の粋な計らいにも引かれます。奉射の部分で良い成績をおさめた射手は、さらに、武芸の腕の競い合い(競射)の部分に参加する。今度は的が、土器2枚を合わせた小的に変わる。命中すると、土器は音を立てて砕け、中に入れてあった五色の紙が花吹雪のように舞い散る。一的、二的的、三的的、とパッと砕けては花吹雪が舞うさまは、どこか花火の切なさにも似る。

明治神宮に奉納された、この日の武田流流鏑馬でもっとも良い成績をおさめたのは、小池義明さん。



名刺には、なんと、「射手頭」とある。武田流馬道の門をたいて、10年。かねてから馬術も弓道もたしなんでいたが、流鏑馬は異次元の難しさであったという。「鞍にまたがる西洋の馬術とはまったく違う、立ちすかしという乗馬法なんです。鞍に座らず、体をゆらしません」

でもやっとなんか、鍛錬士、教士、範士、と4階級あるうち、射手頭の小池さん、武士の世界で心技体を磨きつづけて、武田流流鏑馬でもっとも良い成績をおさめたのは、小池義明さん。

「鞍にまたがる西洋の馬術とはまったく違う、立ちすかしという乗馬法なんです。鞍に座らず、体をゆらしません」

子供の頃に「目見てあこがれた流鏑馬を、社会人になって始めて10年。長年の夢をかなえた喜びを、格闘で誇らしく語るりりしきサムライ、田中さんも、明日はスーツを着てエジニアの顔に戻る。正義の闘いを終えて空へ向かうウルトラマンを見る甘痛い思いで、ますらおたちを見送ったのでした。



Sanctuary of the Lost Samurai

中野香織の
“落日のマッチョ”

休日の流鏑馬によみがえる失われたサムライたち

連載が始まって以来、探し求めてきた「リアル・サムライ」を見つけました。馬上の鎌倉武士と目が合うと、か弱い姫も悪くない気分です。

Text by Kaori Nakano Photos by Nami Kaneko



中野香織 (なかの・かおり)
服飾史家・コラムニスト。1962年生まれ。東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得。英国ケンブリッジ大学客員研究員を経て文筆業に。ウェブマガジン <http://openers.jp/> に「フレンチ道場」を好評連載中。

流鏑馬は武芸である以上に神事である。馬上で弓を射る前には、神宮に鏑矢と願文の奉納、天長地久の式を執り行う。騎射の後には、凱陣の式、誓奏式を経て一連の儀式を終える。写真右は、天と地に対して弓を引き絞る「天下泰平、五穀豊穡、国民安堵」を祈念する奉納の第三十五代司家、金子家教氏。詳しくは、www.yabusame.jp